

2023年6月3日発行

No.53

早稲田大学本庄高等学院通信

発行：早稲田大学本庄高等学院 発行人：半田 亨 〒367-0032 埼玉県本庄市栗崎239-3 ☎0495-21-2400 <https://www.waseda.jp/school/honjo/>

緑風

書：3F 佐藤彩乃（書道部）

教師は何を生徒に残すのか？

早稲田大学本庄高等学院 学院長 半田 亨



「同図書館（都立中央図書館、半田加筆）による積ん読（つんどく、半田加筆）ランキングで第1位はブルースト」

「失われた時を求めて」は、2023年5月4日（木）付朝日新聞朝刊の「天声人語」の一節です。この記事を見て、自宅の押入れを探してみました。

世界最長の難解小説として有名なこの全集を私は、大学1年の時に古本屋を探し、購入しました。天声人語の言に違わず、私も入手した方がいいが、数ページ読んでみただけで挫折しました。数ページ読んでみただけでこんなにも中身が理解できない、と思った瞬間、全集のボリウムを改めて見て「もうダメだ」と思いました。有名な「紅茶に浸したマドレーヌ」の場面（44ページ）にも行き着くことができませんでした。

「失われた時を求めて」を読もうと思ったのは、高校時代の国語の教師の影響です。私の母校は秋田県に進学校でした。私は理系でしたが、3年生になると理数以外の科目では、「内職」と称して聞いているふりをしつつ、数学や物理の勉強をしていた。貴重な睡眠時間と生徒にはその対象でしたが、私はなぜかこの先生の授業が好きで、熱心に聞いていました。この先生は特に加藤周一や森有正などの評論家の文章に潜む思想を熱く語ってくれました。その影響が私には強く残り、大学入学後、国語の教科書に記載されていた、加藤周一の語る桂離宮と修学院離宮の違いをこの目で確認したくて、わざわざ京都まで行きました。当時は、往復ハガキで事前に予約しなくてはなりませんでした。森有正の全集を古本屋で買い集め、読みふけりました。「失われた時を求めて」の存在を知ったのも、彼の文章からです。

高校時代の地理の教員は研究者で厳しい先生でしたが、知識が豊富で世界各国の抱える問題がよくわかりました。そのことが、現在の私の海外ニュース好きにつながっています。地学の先生は、頻繁に授業から脱線して戦争当時のことを語りましたが、私の今の天気や天文好きのきっかけとなっています。

当時、秋田県の高校の修学旅行先は京都・奈良でした。一般の高校であれば京都・奈良、清水、奈良では法隆寺、薬師寺、興福寺などを訪問するのだけれど、私たちは室生寺と秋篠寺へ連れて行かれました。その当時は、「なんでこんな山奥のマイナーな（失礼！）寺に行かなくてはならないのか？」と不満たらたからでしたが、今となれば他の有名なお寺を差し置いて、そこを見せたかった当時の先生方のお気持ちがわかります。

時の先生方のお気持ちがわかります。また、旅行社任せのこの高校にでもあるような修学旅行にはしたくなかったお気持ちもわかります。恐らく多くの生徒にとっては、その後一生行くことのないお寺となっていたでしょう。

自分の教師としてのゴールが向こう側に見え始めたこの頃、改めて思うのです。自分は高校の教師として何を残してきたのだろうか？自分の働いている本庄学院は生徒たちに何を残せているのだろうか？

上で紹介した内容は、私だけのものではない。恐らく他の同級生たちは違う思いがあることだろう。それが多岐にわたる。ならばと、高校時代のことを思い出せば、確実に高校以降の自分の考え方や価値観に大きな影響を与えています。それらがなければ、今の私は、想像を見て、天気図や世界ニュースをテレビで見ても意味を理解できなかったでしょう。加藤周一の評論の内容を理解できなかったでしょう。以前に私が3学年の組主任だった時、台湾コースの見学先として引率教員で相談して台南郊外の八田興一（はつた いち）の墓を訪れたことがありました。八田は東大を出て台湾総督府の土木技師として台湾南部に烏山頭ダムを苦勞の末、不毛だったその地域を穀倉地帯に変えた人物です。台湾の教科書にも掲載されており、台湾人が知っています。アニメ映画「バットマン」に取り上げられましたし、台湾のヒット映画「KANO」でも登場して説明したつもりました。修学旅行の事前学習でも一生懸命説明したつもりました。華やかな要素のまったくないその場所へ行った学院生は「なんでこんな場所に連れてきたんだ」と思ったことだろう。時間に余裕を持てた余り、姿をのぞきまじし。しかし、その中の何人かは今後台湾で働くことだろう。また、台湾の観光スポッを紹介する番組やテレビニュースで取り上げられるかもしれない。その時に、「ああ、そこ知っていた」と思えるか、「なんのこっちゃ」で終わるかの違いが大きいのだと思います。「知っていたよ」と思えるだけで、より理解が深まります。

「知っていたよ」「理解できている」と思える内容が多いほど、身の回りの事象に興味を抱くことができます。それは、人生を豊かにすることにつながります。そう考えると、私たちの教員は、生徒たちのその後の人生がより豊かになる手助けをしているのかもしれない。タイトル「教師は生徒に何を残すのか？」の回答は、より豊かな人生」と書くこと、手前味噌すぎるでしょうか……

ポストコロナ時代における不易流行

保護者の会 会長 鈴木 健一



約3年前に我が国、そして世界を襲った新型コロナウイルス感染症は、今までは「当たり前」と思っていた私たちの日常を一変させました。

街から人がいなくなり、いつもは絶えず人が行きかう渋谷駅前のスクランブル交差点ですら、人影が数えるほどになった時がありました。教育現場においても、前代未聞の全国一斉臨時休業の措置が取られ、数か月に渡って学校から子供たちの姿が消えました。

新型コロナウイルス感染症は、社会そのものにも大きな変化を与えました。一番の代表例が、様々な場面におけるオンラインの活用拡大でしょう。

コロナ以前は、テレビ会議は相応の設備が整った一部の会社等で行われるのみでしたが、今では多くの人が自分のパソコンやスマホでZoomやTeamsといったコミュニケーションツールを用いてオンライン会議に参加しています。さらに、コロナ禍においては、感染拡大を防止するため、他人との接触を避けることが重要とされたことから、オンライン会議の普及と相まって、在宅勤務やリモートワークも一気に広まりました。

また、QRコードを用いたキャッシュレス決済や、ウーバーイーツなどのフードデリバリーサービスも急速に拡大しました。

こうした社会の変化は、いずれもデジタル技術の発達と不可分のものですが、コロナ禍を奇貨として、社会のデジタル化は大きく進みました。最近、チャットGPTという言葉を耳にした人は多いですが、チャットGPTが公開されたのは昨年11月で、世間にチャットGPTという言葉が登場したのは、わずか7か月前のことです。デジタル技術の発達は文字どおり日進月歩と言え、来年にはまた新しい用語が世間を賑わしているかもしれません。

ポストコロナ時代においてもデジタル化がさらに加速することは必至であり、シンギュラリティ（AIが人間の知能を超える技術的特異点）の到来も一般的に

予想されている2045年よりもっと早期になる可能性も十分にあります。学院生をはじめとしたこれからの社会を担う人々は、デジタル化を受け入れるのみならず、デジタルを使いこなさし、さらにはシンギュラリティ以後の社会でも通用するようなデジタル能力や知性を身に付ける必要があると感じています。

一方、ポストコロナ時代においても変わらずなものがあります。

それは人と人との関わり的重要性です。コロナ禍の3年間は、ソーシャル・ディスタンスの名の下、人々の接触は制限され、お互いの顔もマスク姿しか知らない毎日を経験してきました。学院生の皆さんも、入学式・卒業式などの重要な行事が中止された、部活動の制限、あるいは食堂や給食の際の黙食など、新型コロナウイルスに翻弄された中学・高校生活を送ってきたことと思います。

人間は社会的動物と言われますが、その社会性は人と人との関わりの中で得ていくものです。折しも、5月に開催されたG7教育相会合では「対面による教育が最も重要」とされるなど、学びの場における人と人との直接的な関わり的重要性が再認識されています。

5月から新型コロナウイルス感染症も5類感染症に引き下げられました。引き続き適切な感染防止対策を講じる必要がありますが、今後は様々な場面でのコロナ以前の日常を取り戻す動きが本格化すると思います。

こうした機をとらえ、学院生の皆さんには、ぜひ本庄高等学院が誇る全国屈指の恵まれた教育環境を十二分に生かし、学業・部活動・学校行事などに全力で取り組み組んでほしいと思います。また、先生同級生や学年を超えた人々とのリアルな関わりの中で、社会性を磨き、人間関係を築くことも重要です。本庄高等学院で培った人間関係は、今後進学する早稲田大学での大学生活やその後の皆さんの人生においても、きっと支えになってくれるはずです。

ポストコロナ時代を生きる学院生の皆さんが、学院生活を通じて、デジタル能力などこれからの時代に求められるスキルに加え、豊かな人間性を身に付け、今後ますます成長されることを心から願っています。



「ミュージックバナナ」と聞いて、学院生の皆さんは何を思い浮かべるだろうか。これは楽器や楽曲の名前ではなく、音楽を聞かせて追熟させたバナナのことである。音楽を聞かせたバナナといえば、2011年の東京マラソンでランナーに無料配布された「負けないでバナナ」が記憶に新しい。ZARDの代表曲である「負けないで」を倉庫でバナナに大音量で聞かせている様子がテレビ等で報じられたことが話題となった。

ミュージックバナナは宮崎県都城市にある「はなまるフルーツ」が販売しており、追熟にはクラシック音楽の代表的な作曲家であるW.A.モーツァルトの楽曲が用いられ、24時間連続で5日間にわたって延々と聞かせているそうだ。

モーツァルトの音楽、特にヴァイオリン、オーボエ、ピアノ等を用いた器楽曲作品には、3500〜4500ヘルツの高周波音と、人間が心地よさを感じることでできる純粋なゆらぎがバランスよく豊富に含まれていることが知られ、これらが人間の脳神経系を刺激することで集中力を高めたり、心身にリラックス効果をもたらしたりすることが科学的に立証されている。

他にも、牛舎でモーツァルトの音楽を流すと、ホルスタインのミルクの出が良くなり、酒蔵でモーツァルトの音楽を流すと、日本酒の熟成が早まり醸造期間が短縮されたという事例が報告されており、人間だけではなく、微生物などの細胞レベルにおいてもモーツァルトの音楽が生み出す波動の影響を受けているのだと考えられる。

というわけで、百聞は一見にしかず、いや、一食にしかずということで、ミュージックバナナを取り寄せてみた。いざ実食してみたところ、確かに美味しい。見た目はもちろん普通のバナナなのだが、スプーンで売っているものと比べ比べてみると、まるでやわらかく「コ」のある甘味を感じることができた。もちろん、ミュージックバナナと知って食べている以上、先入観がはたらいている可能性は否めないが、一度は食べてみる価値アリ。

ただし、1袋取り寄せるだけでは送料はかかりが高つくため、箱買い（25本くらい入っています）がおススメ。美味しさは是非周りの人ともシェアしましょー！



(R.O.)

New Zealand
プログラム
始まる！

早稲田大学附属系属5校はNew Zealand（以下NZと略）政府公認機関であるEducation New Zealandの2019年に留学に関する協定を結んでいます。このことを受け、本庄学院ではNZへの短期長期を含めた留学や国際交流のあり方を検討してまいりました。2019年の稲穂祭ではオークランドの高校教職員の見学を受けています。その矢先、2020年初頭から始まったコロナ禍により、その活動が一旦頓挫しました。世界の状況もコロナの方向が見え始めた昨年、改めて2023年3月の2週間短期留学を目指し、両高等学院と早稲田大学国際部との間で検討を再開しました。2022年11月には実際に短期留学生を受け入れてもらうことになる北島のPalmerston NorthとHawke's Bayの高校12校を高等学院長とともに訪問し、御挨拶をしてまいりました。この短期留学プログラムはNZの各高校から選抜された生徒が参加し、3月18日～31日の日程で、両高等学院生42名が参加しました。事後アンケートはほとんどの回答が好意的であり、改良点を次回、夏季3週間のプログラムに活かしたいと考えています。



Napier Girls' School での歓迎のマオリのダンス



Palmerston North Boys' School での歓迎のハカ

自分と向き合う旅

3年E組 鈴木 律 希

今年3月、私はKia Oraプログラムに参加し、現地に通いながらニュージーランドのネイピアという町で2週間のホームステイを経験しました。中学時代、学院の国際交流が盛んなところに魅了されて入学を決心したものの、なかなか新型コロナウイルスの感染拡大が止むことはなくこの二年間はかつて自分の中で思い描いていたような活動に挑戦できずにいました。また、高校生になり、英語を流暢で自分の思うままに操れる沢山の同級生に囲まれる、というこれまでとは違う環境に飛び込んで行ったことよって周りと自分を比べてしまい、どんな自分の英語力に自信が無くなっていったしまいました。そんな私がこのプログラムに応募したきっかけは、「英語能力が劣っていると気づいていながらも見て見ぬふりをして逃げていたそんな自分を変えたい」ということでした。そして実際に二週間英語に囲まれた生活の中で、私は自分の英語に以前よりも自信が持てるように、自分の英語と向き合えるようになり自分を変えられたと感じています。どんなに英語が拙くても常に寄り添い真正面から向き合ってくれるバディ、一家族としてあたたかく迎え入れ接し

てくれたホストファミリー、二週間という短い期間を充実したものにしようと毎日のように観光地や博物館に連れて行ってくださり、現地校生活を支えてくださった現地校の先生方。沢山の優しい方々に囲まれ、恵まれた環境の中で家族から離れ異国の地で生活する二週間は「私のこんな英語でも通じるんだ」と実感できる貴重な機会でした。また、オンライン上ではできない、生の生活や文化、言語に触れるということで、自分の中の固定概念を崩し広い視野を手に入れるための第一歩を踏み出すことができましたと感じています。プログラム運営に関わってくださった全ての方々、ありがとうございました。



原点

3年D組 塚原 瑠奈

どこまでも続く青空に羊の群れと馬が佇む緑の草原。夜には、すべてを包み込むような闇夜に輝く無数の星。その大自然の中、私は何にも代えがたい二週間を過ごした。

私が留学したのは、「Ma Tawa Diocesan School」という全寮制の女子校だ。馬術が盛んな学校で、馬術に憧れていた私はこの学校への留学を希望した。私の学校生活をサポートしてくれたバディのレイアは十年以上も馬術を続けており、彼女のように馬術を長く続けてきた人は多くいた。学校には何十頭もの馬がいて、私もダドリーという馬のお世話と乗馬をした。彼らを放牧するための広いスペースもあり、毎週月曜日の放課後には、放し飼いの馬や羊たちを横目に、一周約2kmに及ぶ広大な学校の敷地内のコースを走った。現地の季節は秋で、友達とおやつ、林檎を片手にジョギングをし、とても清々しい午後を過ごした。しかし翌日、日焼け止めを塗っていなかった私は日焼けで顔の皮が剥けてしまった。ニュージーランドは環境破壊によってできたオゾンホールに近く、紫外線量が日本の何倍にもなるのだという。そのため、寮の入り口には大きな容器に入った日焼け止めが置いてあった。環境破壊がいかに深刻な問題なのかを身をもって知ることになった。私を見守ってくれたニュージーランドの大自然を未来に残すために、私にできることは何なのだろうか。そう改めて考えさせられた。

私は、留学を通して多くの人の優しさに触れた。私を笑顔で送り出してくれた家族。気遣い上手な寮母さん。休日にはドライブに連れて行ってくれた英語・マオリ語の先生、そして何より、私の拙い英語にも向き合ってくれた友達。日曜の夕方に裸足でサッカーをしたり、ミュージカルを観た帰りに、某ファストフード店に数十人で駆け込んだことは、きっとこの先忘れることはない。この経験を受けた愛を返せる日まで、私なりの努力を重ねたい。



教員コラム

木もれ目

オーストラリアのすゝめ

英語科 岡田陽子

2022年度オーストラリアのGold Coast 空港から車で30分くらいのマイアミ地区に一年間滞在した。以前もイギリスのBirminghamに一年間滞在したことがあったが、その時と大きく私の滞在生活を変えてくれたのは、一緒に連れて行った3人の娘たちだった。この3人の存在のインパクトは非常に大きく、私に多くの経験や出会いをもたらしてくれた。今回は、この3人が奮闘した小学校での生活を中心にオーストラリアについて語ってみたいと思う。

娘たちは、4月から現地の小学校のPrep, Year 2, Year 4のクラスに入った。この小学校はPrepからYear 6までの7学年が学ぶ、ごく普通の規模の公立学校である。児童のほとんどが地元で暮らすオーストラリア人であったが、他の多くのオーストラリア人同様、祖父の代はイギリス人の子、両親はブラジル人の子などそのルーツは様々で、両親が日本人の子も各学年に数人程度混ざっていた。しかし、日本人の子達を含め、私が知る限りほぼ全員の児童がオーストラリア生まれで、海外で生まれて短期滞在目的で入学してきた子たちはおそらくうちの3人の娘たちだけだった。

英語もろくに理解できない娘たちを突然そんな環境に放り込んで、友達ができるかなど色々心配したが、そんな心配は初日で吹き飛んだ。初日学校に行くところ、海外生まれの娘たちが珍しいのか、一気に十数人の生徒に取り囲まれて、大歓迎を受けた。先生たちも、英語が理解できないことをハンディと取るのではなく、日本のことを他の子が知る良いチャンスとばかりに、多くの機会を与えてくださった。いつも「あなたがクラスにいることで私たちはハッピーよ」と温かい言葉と笑顔で惜しみなく与えてくれる。また、驚いたことに3人とも毎週のように色々な友達から「I love you so much」の手紙をもらって帰ってきた。一番下のPrepの子は、毎朝のように遠くから友達と走ってきて、何年も会わなかった親友との再会のようなハグをしてくれた。そんな愛と笑顔に溢れた小学校だった。表の場もあり、様々なイベントや発元の農家から譲り受けた鶏卵をクラスで飼育、2週間ほどかけて卵から雛が孵るところをみんなで観察していた。またハ

リーポッターなど日本のキャラクターに慣れた仮装で登校したり、歴史の授業の関連で全員が植民地時代の格好をして一日中授業を受けたりすることもあった。また、Year 1から第二言語の授業があり、低学年はAustralianと言われ、Australian Sign Language (手話)、中・高学年はJapaneseを第二言語として全員が学んでいた。お隣のNew ZealandでもSign Languageは公用語に指定されており身近な言語のようであるが、Japaneseもオーストラリアでは人気である。Japaneseが小学校の必修科目になっていることは予想していなかったが、娘たちにとつて自分の言語をクラスメートが学んでいる姿を見ることは良かったと思う。また、多くの表彰の場が用意されていて、学校集会ではStudent of the weekと言って、最近頑張っている子が全員の前で表彰される。日本で表彰台にのぼると言ったら、特別優秀な子と思うだろうが、実は年間を通してクラスの全員が選ばれ、これに選ばれたら、家族も学校集会に招かれ、家族全員でその表彰を喜ぶ。結果的に全員がもらえる賞なのに、「We're so proud of you!」である。私も年間8回ほどこの全校集会に足を運んだ。授業をあまり理解していないであろううちの娘たちも「熱心に授業に参加している」「最高の数学者」「友だちに優しい子」など何かしら理由を見つけて表彰してくれた。その他のスポーツ大会でも、地元クラブのZippersでも表彰状やメダル、副賞など色々もらって帰ってきた。前述のラブレターと合わせると、段ボール箱いっぱいのはずとLoveがお土産になった。オーストラリアでは、こんな風にどんな子でもいいところを見つけて全力で褒めてくれる。ここで育つ子供は成長に一番大切な自己肯定感も相当高くなるのだろう。



現地小学校にて

スポーツも盛んで、この小学校はラグビー、サッカー、バレー、テニス、ネットなど、有する巨大な公園の真ん中に位置しており、登校前の1時間ほどの間、多くの児童がそうした施設で、地元のクラブの方などの指導を受けながら、好きなレッスンを受けていた。うちの娘たちも Skateboarding, Tennis, Basketball, Art, 3D printingのレッスンを受けた。特にSkateboardingは全くの初心者だったが、上手くなるとスケートボードで小学校まで通学したりしていた。また10月から3月の夏の時期は、車で10分ほどのビーチでZippersという子どもらいフセーバーの活動にも参加した。おおよそ5歳から14歳くらいの大勢の子が所属しており、オーストラリアのビーチにはそんなZippersがかなりの数あり。子どもたちは、浜辺の短距離走、ビーチフラッグス、ボディーボードなどを海でトレーニングする。一番下の子のボディーボードの練習では、親と一緒に海に入るため、私も毎週水着で参加した。毎週日曜日、

朝食とランチを持って海辺まで車をとばし、早朝から活動を見守りながら、私もオーストラリアの広い海を満喫した。そんな実体験盛り沢山の小学校生活だった。オーストラリアでは、I.Tの導入も進んでいた。小学校では、先生と保護者との連絡や配布資料、支払いはほぼ全て携帯のアプリで完結していたし、私が所属した大学院や地元の図書館では、本の貸出しや返却の際に有人カウンターに行くことは一度もなかった。いやそれ以前に、大半の本が電子化されていたので、子供用の絵本を除いて本を借りる図書館に行く必要がなかった。オーストラリアは、その広い国土のため、教育におけるI.Tの導入が早い。Outback regionsなどの砂漠地域を中心として、学校教育が行き届かない地域の子どもたちを対象にSchool of the Airと呼ばれる遠隔授業がなんと1950年代からスタートしている。もちろん当時はI.Tはなかっただろうが、もちろんバックグラウンドから教育のI.T化が進んだ。本庄高等学校が、この遠隔授業School of the Airで育ったオーストラリア人である。それにしても、一見対立しているかのようなI.Tと実体験が見事に共存している国である。オーストラリアが好きになった私が書いているのだから、良いところばかりを書けば最高の生活が待っていると言いたいわけではない。娘たちもここに書いていない涙も沢山流した。でも私が見る限り、オーストラリアは、どんな人種も人間も大切な友人として受け入れる、その国土に負けないくらい大きな愛と笑顔に溢れた国だった。私自身出会った人たちの心の温かさや「No worries」の精神に何度も助けられたし、このオーストラリア流の精神があれば世の中の大半の問題は片付くような気がする。娘たちが、先生や友人たちから多くの愛と笑顔を与えてもらったのは、彼ら自身が普段から多くの愛と笑顔に包まれて生活しているからであると思う。日本帰国後、キッズメッセージで毎週のように「I miss you」のメッセージを送ってくる娘の親友が、「あなたが大好きだから、自分でもJapaneseの勉強を始めたよ」と言っていた。皆さんもぜひ、愛と笑顔あふれるオーストラリアの地で、Englishを学ぶ理由をもう一つ見つけてみてはいかがだろうか。



天下分け目の戦いといえ、関ヶ原の戦いである。誰もが一度は聞いたことがあるだろう。では、「その場所は何県?」「行ったことはある?」「尋ねれば、大方の人が沈黙し、「行ったことはない」と答えるだろう。なお、場所の正解は岐阜県不破郡関ヶ原町。そして、かくいう私も昨年の夏に副顧問を務める地歴部ではじめてその場所を訪れた。人文社会科学系の学問は、図書館や資料室に籠ってひたすら史料を読むというイメージがあると思う。実は人類学や地理学、歴史学を専攻している人は歩き回るのが好きな人が多い。自分の目で見て、感じたことを研究に生かすためだ。

関ヶ原町では、家康の陣跡から石田三成の陣跡まで部員と一緒に歩いた。住宅街を抜けると一面の畑が広がり、その先の小高い山の麓に島左近の陣跡、そして頂上を見晴らしのよい場所に石田三成の陣跡があった。歩いてみると思ったよりも両者の陣地は近く、この距離で両軍が対峙したのかと感慨深いものがあった。これも歩かなければ得られなかった実感だ(なお、この日の巡検で歩いた距離は一千キロだった...)。

自分の足で歩き、五感を使っ得た情報は、直接的に論文には反映されない。しかし、史料を読む際に想像力を豊かにする。それは研究にも興行きを持たせるということだ。歴史を学ぶ意義の一つは、想像力の豊かさを養うことだと思う。想像力や共感性は、何より人生を豊かにするものだ。だからこそ、皆さんには自分の五感を使って歴史を実感するフィールドワークをお勧めしたい。

次は国語科の橋本先生、よろしくお願います!

魅力的な先生の紹介

#バトン#5

フィールドワークのスズメ

地理歴史科 松田英里

留学生の紹介

田黄さん

I am Tien Huang, a Japan Taiwan Exchange Association scholarship in 2022 student to study in Japan for about a year. Yilan, Taiwan is where I am from. During my stay, I appreciate every friendship I have built, all the unique experience I have underwent, and the rich opportunities I have received at Waseda Honjo.

My one-year stay will never be complete without my friends in tennis club. Although I was inexperienced in tennis and wasn't able to communicate smoothly at first, I was warm welcomed by their open arms. I had never felt so lively before: balancing my school life between academics and sports, which is very different from my Taiwanese high school life (with 8 classes every day and almost no time for club activities due to strictly academic-oriented public high school). I particularly want to thank all of my friends in tennis club, who enrich my life not only at present but also in the future, for I will always remember how lucky I am to get to know them wherever I will be.

I am also grateful to receive national awards in art and calligraphy exhibitions by seizing the chance to participate various competitions as a Japanese student. (The picture of the artwork with a silver award in the Art-Exhibition for All-Japan students and school children in 2022 is next to my article.) Without support from my coach and teacher in the calligraphy club and class respectively, I believe such achievements could not belong to me. While practicing calligraphy here in Japan, I combined the traditional style of both Chinese and Japanese calligraphy which made me as an intercultural bridge of art. Being aware of my new identity which I



interpret for myself, I started to understand that there are no boundaries nor barriers for art in this world. Thus, I thirsted to challenge my ultimate limitation.

To make up for so much warmth and care I received that I cannot mention all the names and events in a few lines, I poured all my emotions whole-heartedly into my personal exhibition named "Jiyou" (emotions), which was held in Waseda No Mori Museum from 20-30 in May 2023. Artworks including traditional Chinese art and calligraphy were created when I was touched or inspired on different occasions, and I wanted to spread all the touching moments to as many people as I could. Besides, I plan to hold my exhibition again at my school after going back to Taiwan in order to share my extraordinary experience through my art to all students, hoping to encourage them to dream boldly and believe the possibility to pursue impossibilities. Speaking of which, I am really thankful that Waseda Honjo offered me countless support and opportunities to make this event come true. Because of this chance, I realize that art is a world of possibility and a world I would like to share. A world I am infinite. Recalling all the memories I have this year, I found that Japan could not simply be represented by sushi, kimono or sakura; instead, unforgettable friendships, the strength of art, and my everlasting youthfulness became the exclusive connection between Japan and me. Last but not least, thanks for everyone and everything that contributed to the existence of this article and me.



各種プログラム報告

アントレプレナーシッププログラム

本庄学院は2022年度より早稲田大学アントレプレナーシップセンターとの連携のもと、アントレプレナーシップ教育プログラムを展開しております。アントレプレナーシップとは現代の複雑な時代においてより良い社会を創造するために必要な力のことで、狭義には「起業」する力と考えられることが多いようです。2022年12月以降、以下のプログラムに参加しています。

◆スタンフォード大学d.school講師3名によるデザイン思考ワークショップ(12月14日(水))



デザイン思考とは、多様な要素の絡み合う複雑な社会問題・答えのない問題に対して、最も適切な解決策に至るための思考の方法で、近年教育プログラムの必要性が叫ばれております。d.schoolはデザイン思考において有名なプログラム発信地です。この度、本庄高等学院で実施できることとなりました。21名の学院生が参加し、すべて英語で行われました。

◆WASEDA-EDGE Demo Day (2月21日(火))

Demo Dayは早稲田大学アントレプレナーシップセンターが主催する、人材育成プログラムとして法人設立及び新規事業立ち上げを検討している学生向けに、それらのプロジェクト・アイデアを発表できる場をコンテスト形式で提供する試みです。今回は、参加25チームの中で、初めて高校生枠として本庄高等学院からLittle Ambassadors (3年久米



川夏穂、2年荻島南々桃・向川綾音)とバビオン(2年秋山友花・向田華梨、3年勝又綾太郎)2チーム6名が参加し、両チームがWEYI賞を受賞しました。

◆GTIEアントレ教育シンポジウム(3月22日(水))

「[Greater Tokyo Innovation Ecosystem (GTIE: ジータイ)]は、東京大学・東京工業大学・早稲田大学を主幹機関とした『世界を変える大学発スタートアップを育てる』プラットフォームです。」(https://gtie.jp/から引用)。東京大学にて「GTIEアントレ教育シンポジウム」が開催されました。大学生主体のイベントですが、本庄学院からは、谷口明莉・進藤千歳さん・谷口明莉さんが参加・発表を行うことができました。



2023年度は、デザイン思考ワークショップ等のプログラムを継続的に実施する努力をするとともに、附属系属等高校間の取り組みができないか検討したいと思っています。

国際交流活動

◆Asia Academic&Cultural Sessions (A' ACS) 2023 (1月15日(日)、1月22日(日))

Asia Academic&Cultural Sessionsは、新型コロナウイルス感染症のパンデミックが始まった2020年に「このまま、今までで継続されてきた国際交流を絶やしたくない」という学院生の要望から、始めたオンラインの国際高校生シンポジウムです。生徒スタッフが2日間のシンポジウムを、すべてコーディネートしています。第3回目になる今回は、国内4校(高校3校、大学1校)、海外5カ国(6校)が参加して開催されました。

◆International Collaborative Research Fair(ICRF) 2023 (1月28日(土))

1月28日にSSH校である立命館高校が主催するInternational Collaborative Research Fair 2023 (以下ICRF)がオンラインで開催され、本校からは3年濱谷澤・谷口明莉、留学生のFrida Denningが参加しました。Fridaさんは1月11日にドイツに帰国したので、ドイツからの参加となりました(朝5時1)。ICRFは世界最大規模のオンライン高校生科学シンポジウムです。

◆タイ研修(Thailand International Science Fair2023) (2月12日～18日)

コロナ禍以前は、タイの姉妹校であるMahidol Wittayanusorn School (MWIT)との間で10人程度の生徒の相互交流プログラムを実施していましたが、この3年間はできませんでした。この度、MWITがコロナ禍以前に2年に一度実施していた世界最大規模の高校生シンポジウムであるThailand International Science Fair (TISF)を対面で開催することとなり、その参加を軸にタイ研修を復活させることとなりました。6名の生徒(3年勝又綾太郎・中島真理子・佐々木結・谷口明莉・進藤千歳・内海香奈子)が参加しました。コロナ禍以前は世界30カ国以上の参加するイベントでしたが、今回は16カ国49校の参加にとどまりました。それでも200名を超す参加者でした。



◆ミニシンポジウム「国際交流への誘い」 (4月8日(土)19時～20時)

このイベントは、コロナ禍が始まった2020年4月に、それ以前まで積み重ねられてきた本庄高等学院の国際交流の伝統が途絶えてしまうことと、そのことにより国際交流の良さを知らない学年ができてしまうことを憂え、当時の新入生に少しでも国際交流の魅力を伝えるために開始したイベントです。この日は、1年生とその保護者の皆様中心に160名の参加者がありました。最初に立命館大学教職大学院准教授の田中博先生からの基調講演をいただき、その後昨秋からの対面での国際交流に参加した生徒のうち6名がパネルディスカッション形式で、具体的なイベントを紹介

しながら、それぞれの良さや注意点を伝えました。

地域・企業連携活動

◆こども科学教室(3月21日(火))

3月21日(火)午前・午後の2回、こども科学教室～ちりめんモンスターを探せ!～を実施しました。「ちりめんモンスター」とは、未精製のチリメンジャコに交じっている小動物のことで、これを調べることで、そのチリメンジャコが採取された海の環境がわかります。前半に本庄市内の河川で見られる川の生物をとり上げ、後半に海の生物をちりめんモンスターを切り口として取り上げました。



◆川のシンポジウム2023 (3月11日(土))

このシンポジウムは河川研究班の活動でもっとも大きなイベントです。本庄市内河川環境について広く市民の方に広報することを目的として実施しています。今年度も早稲田リサーチパークで対面・オンライン併用のハイブリッドで開催しました。昨年同様、三重大学附属小の皆さんもオンラインで参加してくださいました。また、タイからMahidol Wittayanusorn School(MWIT)のDome氏がチャオプラヤ川について、オンラインで報告してくださいました。

◆はわフェスタスタッフが感謝状を受け取りました(12月15日(木))

はわフェスタは、上越新幹線開業40周年を記念し、JR本庄早稲田駅と本庄学院のコラボで11月13日(日)に実施したイベントです。12月15日(木)、東日本旅客鉄道株式会社高崎支社長の南沢さまより開催の協力について、スタッフ(卒業生加藤愛理・金子みどり・長岡凛(リダー)、3年久米川夏穂・浦田晃駿・吉野裕樹、2年青木優奈)へ表彰状、イベント参加団体へ記念品の贈呈を受けました。また、すべてのイベント参加者へ、一人一人記念品が授与されました。



3年森香南子さん、JSEC2022で朝日新聞社賞受賞

JSEC (Japan Science & Engineering Challenge)は、日本で最も権威のある高校生・高専生に向けた科学コンテストの1つです。上位8研究は、アメリカのグラスで開催されるInternational Science and Engineering Fairに招待されます。今年度のJSECは20周年の記念大会で、12月10日11日の2日間、お台場の地球未来館で、1次選考を通過した30研究の高校生が集い、開催されました。森香南子さんの「アメリカザリガニのメスからオスへの交尾行動の解析」が2日間にわたる専門家および協賛企業の審査の結果、朝日新聞社賞を受賞し、副賞として賞金をいただきました。本庄学院では、過去にも4回最終選考に進んでいますが、入賞は2回で、この賞はそのうちで最もレベルの高いもので、快挙と言えます。



生徒達の活躍

◆スキー部

伊能百香(3 G)
・令和4年度埼玉県学校総合体育大会(高校の部)兼全国高等学校総合体育大会スキー競技予選会 GS (ジャイアントスラローム)種目1位(優勝)
SL (スラローム)種目2位(準優勝)
同予選会女子学校対抗戦2位
・令和4年度第58回関東高等学校スキー大会出場 GS (ジャイアントスラローム)種目17位
SL (スラローム)種目8位入賞
・令和4年度第72回全国高等学校スキー大会(アルペン) GS (ジャイアントスラローム)種目45位
SL (スラローム)種目50位
・第35回全国高等学校選抜スキー大会
令和4年度第35回全国高等学校選抜スキー大会
女子スーパー G競技種目31位、女子大回転競技DNF、女子回転競技でDNF

◆ソフトテニス部(男子)

・関東大会埼玉県予選会北部支部大会・男子個人戦 (4月23日@熊谷さくら運動公園)
ベスト64 田島知修(2 G)・豊田惺也(3 F)ペア
田中奏大(2 C)・長屋和樹(2 E)ペア
石島湧斗(1 G)・関春弥(1 B)ペア
・関東大会埼玉県予選会・男子団体戦 (5月4日@くまがやドーム)
2回戦 早大本庄②ー1 秩父
3回戦 早大本庄0ー②熊谷西
※インターハイ県予選団体戦の出場権を得ました。

◆ソフトテニス部(女子)

・関東大会 埼玉県予選会 個人戦 北部支部大会 (4月25日@熊谷さくら運動公園)
1位 皆上 心(1 A)・杉崎里奈(2 H)ペア
ベスト4 生井美紀(3 H)・新島優芽(1 D)ペア
・関東大会 埼玉県予選会 個人戦 (5月4日@熊谷さくら運動公園)
ベスト20 生井美紀・新島優芽ペア
ベスト32 皆上心・杉崎里奈ペア
※生井・新島ペアは、6/3に千葉県白子町で行われる関東高校ソフトテニス選手権大会への出場を決めました。
また両ペアともにインターハイ県予選会への出場権を得ました。



◆バドミントン部

・埼玉県学校総合体育大会北部支部予選会(学校対抗) (4月17日・18日@くまがやドーム)
男子 3位 女子 10位
・埼玉県学校総合体育大会北部支部予選会(個人対抗) (5月8日・10日・11日@くまがやドーム)
男子シングルス 2位 森 和喜・ベスト16 宮内直翔
男子ダブルス 3位 森 和喜・宮内直翔
ベスト16 幹田竜斗・小野川結太
女子ダブルス ベスト16 下田莉子・浦上友莉

◆バレーボール部

・新人戦(北部地区予選)
早大本庄×1ー2○本庄東 1回戦敗退
・春季大会(北部地区予選)
早大本庄○2ー0×深谷第一
早大本庄×0ー2○熊谷
<代表決定戦>
早大本庄○2ー1×進修館
早大本庄○2ー0×松山 県大会出場
・春季大会(県大会)
早大本庄×0ー2○大宮工業 1回戦敗退

◆自転車部

・一部三県自転車競技大会埼玉県予選会
2023年1月29日 (大宮双輪場)
細谷幹大(3 A) ケイリン7位
・埼玉県小見野クリテリウム
2023年2月12日 (川島町特設コース)
細谷幹大(3 A) ジュニア上級10位
・全国高等学校選抜自転車競技大会
2023年3月10日～13日 (北九州メディアドーム・日田市オートボリス)
細谷幹大(3 A) スプリント予選 26位
個人ロードレース 56位(完走)



・関東高等学校自転車競技大会
2023年5月5日・6日・8日 (大宮双輪場・群馬サイクリススポーツセンター)
学校総合対抗6位
細谷幹大(3 A)・渡邊陽斗(2 D)・小林利暉(2 G)
チームスプリント6位
細谷幹大(3 A)
1kmタイムトライアル11位、
3kmインディビジュアルパーシュート 2位、
4km速度競争 1位、個人ロードレース 17位

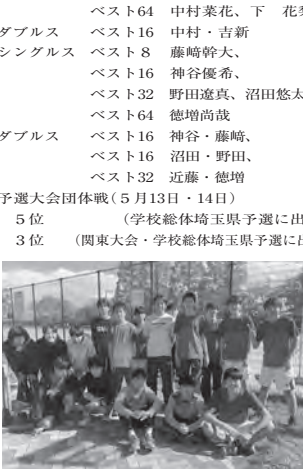
◆硬式テニス部(男女)

・関東予選大会埼玉県北部地区予選 (4月14日～17日、22日 県大会出場分)
女子シングルス
準優勝 吉新なつき
3位 中村菜花
16位 下 花梨
23位 小清水帆南
25位 松田依桜
女子ダブルス
準優勝 中村・吉新
7位 下・松田
15位 久保井・小清水
男子シングルス
優勝 藤崎幹大、準優勝 野田遼真、
3位 野田悠太郎、9位 神谷優希、
10位 徳増尚哉、14位 大西 諒、
18位 矢野優希、27位 藤田 拓巳、
28位 錦戸 大征
男子ダブルス
優勝 沼田・野田、
準優勝 神谷・藤崎
6位 近藤・徳増、12位 大西・矢野



・関東予選大会埼玉県大会(4月29日・30日、5月3日)
女子シングルス
ベスト32 吉新なつき、
ベスト64 中村菜花、下 花梨
女子ダブルス
ベスト16 中村・吉新
男子シングルス
ベスト8 藤崎幹大、
ベスト16 神谷優希、
ベスト32 野田遼真、沼田悠太郎、
ベスト64 徳増尚哉
男子ダブルス
ベスト16 神谷・藤崎、
ベスト16 沼田・野田、
ベスト32 近藤・徳増

・関東予選大会団体戦(5月13日・14日)
女子 5位 (学校総体埼玉県予選に出場予定)
男子 3位 (関東大会・学校総体埼玉県予選に出場予定)



◆陸上競技部

陸上競技部は既にインターハイ県北予選会、埼玉県予選会を終えました。今年も陸上部員は多くの素晴らしい結果を残しています。県大会の結果は悲喜交々でしたが、選手たちは全力を尽くして素晴らしいパフォーマンスを発揮していました。今年は4種目4名が北関東インターハイへの出場を決め、そのうち2名は埼玉県チャンピオンとなりました。北関東へ進む選手は全国インターハイを目指し、それ以外の部員も先の長い今シーズンに向けて、引き続き陸上競技と部活動を楽しみながら一生懸命取り組んでいます！

・県北大会(4/21～23熊谷)入賞者
男子 100m 原田 勇吹(1) 1位 10" 77
滝澤 悠貴(3) 4位 10" 99
200m 滝澤 悠貴(3) 2位 22" 99
井上 優河(3) 8位 54" 64
800m 吉田 泰喜(3) 5位 2' 05" 14
松本 泰成(2) 7位 2' 06" 47
1500m 倉本倫太郎(3) 1位 4' 00" 63
吉岡 龍一(3) 3位 4' 03" 15
倉本倫太郎(3) 1位 15' 29" 00
5000m 副島匠太郎(2) 1位 27' 31" 56
4×100mリレー 早大本庄 3位 43" 04
(鈴木-原田-井上-滝澤)

走り幅跳び 佐藤 大地(1) 2位 6m70
石原 佳篤(2) 4位 6m54
三段跳び 堺 奏太(2) 8位 11m81
八種競技 石原 佳篤(2) 1位 4910点
竹島 龍児(1) 8位 1360点
女子 100m 笹林 友里(2) 2位 12" 75
伊藤 和奏(1) 7位 13" 10
200m 笹林 友里(2) 2位 26" 69
800m 吉田 羽那(3) 7位 2' 32" 83
大塚 美咲(2) 8位 2' 35" 60
1500m 吉田 羽那(3) 7位 5' 03" 19
400mH 松永 成美(2) 1位 1' 11" 18
5000m競歩 白倉 千賀(3) 2位 27' 25" 09
井上 歩香(3) 4位 29' 58" 99
富矢 理央(2) 5位 31' 55" 40
走り高跳び 川瀬 仁香(3) 3位 1m53
走り幅跳び 伊藤 和奏(1) 1位 5m09
砲丸投げ 松永 成美(2) 2位 10m29
やり投げ 松永 成美(2) 1位 43m59
柴田 莉奈(3) 5位 29m24

・県大会(5/10～13熊谷)入賞者
1500m 佐藤 広人(3) 1位 3' 56" 58
北関東大会出場
倉本倫太郎(3) 3位 3' 57" 34
北関東大会出場
3000m障害 佐藤 広人(3) 2位 9' 19" 06
北関東大会出場
吉岡 龍一(3) 7位 9' 31" 25
5000m競歩 副島匠太郎(2) 7位 26' 20" 85
八種競技 石原 佳篤(2) 4位 4872点
北関東大会出場
女子5000m競歩 白倉 千賀(3) 7位 27' 43" 89
走り高跳び 川瀬 仁香(3) 7位 1m55
砲丸投げ 松永 成美(2) 8位 9m33
やり投げ 松永 成美(2) 1位 47m71
北関東大会出場

◆ラグビー部

・新人戦県北大会
1回戦 12月18日(日)
正智深谷 28 (7 / 21) - 5 (5 / 0) 早大本庄
・関東大会県予選
1回戦 4月16日(日)
早大本庄 33 (19 / 14) - 7 (7 / 0) 進修館
2回戦 4月22日(土)
熊谷工業 86 (40 / 46) - 0 (0 / 0) 早大本庄
・国体県大会県北予選
1回戦 4月30日(日)
早大本庄 88 (36 / 52) - 5 (0 / 5) 合同B
準決勝 5月4日(祝)
早大本庄 21 (7 / 14) - 10 (0 / 10) 正智深谷
決勝 5月6日(土)
熊谷 71 (40 / 31) - 7 (7 / 0) 早大本庄

◆次の大会は5月27日から始まる国体県大会です。その大会で、9月から始まる全国大会県予選のBシードを獲得すべく、日々精進しています。引き続き応援のほど、よろしく願い致します。1年生諸君、ラグビーは本当に素晴らしいスポーツです!いつでも入部OKです。経験の有無は問いません。楯円球に少しでも興味のある人は是非グラウンドへ見学に来て下さい!!

◆硬式野球部

・春季大会
北部地区予選 4月14日(金)
代表決定戦 対北本高校(@熊谷公園球場) 11-10
・県大会
4月22日(土)
1回戦 対春日部高校(@熊谷公園球場) 3-10
硬式野球部としては、2021年度春季大会から数えて5シーズン連続での県大会出場となりました。県大会では応援部・プラスバンド部のみなさまに応援に来ていただきました。この場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。

◆剣道部

5月5日 寄居町剣道大会・女子個人の部、
3位入賞→小島悠里(2年)、家坂鈴穂(1年)

◆卓球部

・関東高校卓球大会埼玉県予選会
シングルス
ベスト64 増田裕雲(3 A)
ベスト64 高橋侑那(1 E)
ダブルス
ベスト64 高橋知那(3 A)・高橋侑那(3 A)
・女子学校対抗
ベスト16 ベンチ入りメンバー
高橋知那(3 A)・高橋侑那(1 E)・
村田悠夢(2 E)・古澤結奈(2 B)
萩原歩花(3 D)・高橋優子(2 H)

※女子学校対抗でベスト16にまで進出したのは快挙といえます。

◆女子バスケットボール部

・埼玉県新人大会
1月14日 春日部市庄和体育館
2回戦 ×早大本庄69-71○秋草学園
・北部支部選手権大会
5月4・5日 熊谷市民体育館など
2回戦 ○早大本庄56-49×東京農大三
3回戦 ○早大本庄67-54×熊谷農業

◆囲碁将棋部

囲碁部門埼玉県代表候補者最終選考会において3年吉田泰喜が男子3位となり7/31、8/1に行われる第47回全国高等学校総合文化祭鹿児島大会男子個人戦への出場が決定しました。

◆書道部

・(2022年度)第75回埼玉県書き初め中央展覧会
埼玉県書写書道教育連盟賞
2 G 井上 桜依良
特賞賞
3 F 佐藤 彩乃・3 F 田 黄・2 F 武井 愛朋
優良賞
3 E 大澤菜々乃
◆フencing部
沼田美咲(3 G)
3月にウズベキスタンで行われたアジアフencing選手権大会に女子ジュニアフルーレの部で日本代表として出場し、個人戦7位、団体戦2位の結果を残しました。また、4月にブルガリアで行われたフencing世界選手権大会に女子ジュニアフルーレの部で日本代表として出場し、個人戦14位、団体戦5位となりました。以上の戦績によって、世界ランキングが33位となっています。